

町制施行 50 周年記念シンポジウム

「伊奈忠次・徳川家康に認められ、江戸時代の礎を築いた人」

開会行事

町長あいさつ

小和田哲男氏講演

ただいま紹介いただきました小和田です。いま紹介していただきましたように、NHKの大河ドラマ、「秀吉」から一昨年（2017年）の「おんな城主 直虎」まで時代考証をやっておりますけど、来年（2020年）、明智光秀が主人公の「麒麟がくる」も既に時代考証が進んでおります。この「麒麟がくる」でも徳川家康がしばしば登場するということになっていきますが、今日は、町制施行 50 周年という、その家康を支えた伊奈忠次の生涯ということで、お話をさせていただきたいと思っております。皆さんお手元に簡単なレジュメ裏表一枚用意させていただきました。短い時間ですので、あまり脱線しないようにその順番で話をしていきたいと思っております。

そもそも伊奈氏というのはどういう家なのかということなんですけれども、名字の地は信濃国の伊那郡、字が違うんですよ。ですが、いまだ、伊奈忠次の「奈」を使ったりしているんですよ。ですから、当時は発音が一緒で、同じだったということなんです。信濃から三河へ移ってくるんです。レジュメに略系図を入れておきました。嫡流家、当時武士の家と言うのはいわゆる跡取り、正規の家督を継いだものが嫡流で、分家筋に当たるのは庶流家、庶家なんていう言い方をします。嫡流家の最後、昭綱。この伊奈昭綱という人は実は、有名な人なんです。関ヶ原の戦いの時に、有名な話なんですけど、直江兼続が、いわゆる直江状というもので家康にたてつく、そういったときの手紙のやり取りなんかを使者として行ったり来たりしてそういった人物だったんです。けれども、嫡流家の方はその後、残念ながら絶えていきまして、分家筋の貞政の弟の忠家からはじまった庶流家ですね、その忠次のこ

ろにむしろ、伊奈家の嫡流になる。で、嫡流家の方は関ヶ原の戦い後、いわゆる絶家という言い方しますが、家が絶えたという形になります。

伊奈忠次なんですけれど、生まれは天文 19 年です。1550 年。伊奈忠家の長男として誕生するわけなんですけれども、この頃まだ、松平ですけれども、松平家はけっこう波がありまして、ご承知の方多いと思っておりますけど、家康のお父さん、松平広忠。松平広忠という方は、西からは織田信秀、信長のお父さんですね。東からは今川義元、これに攻められて、いわゆる弱小国ですので、どっちかに付かなければならないということで、結局広忠は今川側につく選択をするわけです。で、今川についたときに、今川が「一人息子を出せ」と言う、要するに裏切らないようにということで質、人間ですから、人質というんですが、それを取ります。ところが、途中で織田方に奪い取られるという出来事が起きます。この奪い取られた、途中で、だまされて連れて行かれたというのはこれまでの通説なんですけど、最近新しい研究が出まして、別な解釈ができる史料がある。どういうことかということ、むしろ松平広忠が、織田信秀と戦って負けて、自ら自分の子どもを織田家に出したということを書いた史料もある。ということで、これはもう少し、今後その史料の信憑性がどうなのかということも合わせて見ていかなければいけないんですけれども、いずれにしても、家康自身はしばらくの間、取り残されまして、今川の人質として、生活してきた。それで、ご承知のように永禄 3 年、1560 年の桶狭間の戦いで、今川義元が討たれ、そのときに、まだ家康じゃないんですね、元康、松平元康、それが、自立いたします。ということで、しばらく自立して三

河一國をなんとかなんとか自分のものにするんですけれども、永禄6年、1563年三河の一向一揆が起きました。その時に忠家、つまり忠次のお父さんは一揆側につきます。と言うことで、結局は松平家にいられなくなりまして、出奔いたします。その時に、息子の忠次も、まだ小さいですけどね、1550年生まれですから永禄6年だと14歳で、お父さんと一緒に三河から追い出される、そんな感じになります。ところが天正3年です。1575年あの有名な、三河長篠・設楽原の戦いとき、やはり三河が恋しいというか、家康がだんだん偉くなってますので、また、松平、この頃はもう徳川になっていますが、徳川につきたいということで、松平信康の軍勢に加わって戦います。信康は、家康の長男ですね。お母さんが築山殿、今川義元の系図の上では姪に当たる女性です。その信康に認められて、松平信康につく事になります。ところが、運が悪いと言ったら運が悪いんですが、この松平信康が天正7年、1579年ですけども、築山殿事件とかあるいは信康事件という言い方をしている事件が起きます。これも実際のところがどうなのかって言うのがまだわかってないんです。とにかく、長男の信康が、二俣城で切腹させられる。築山殿は佐鳴湖畔で殺されるんです。結局ここで自分が仕えていた主人の松平信康が徳川家に反旗を翻したわけではないんだけど、信長の命令でという説もあるし、家中の反対派が強くなって信康排斥だっということで殺されたんだという説もあって、この辺りはなかなか真相がわかりにくいんです。いずれにしてもまた三河・遠江にはいられなくなりまして、泉州の堺ですね。いまの大阪府の堺市に行きます。そこでまたひとつの大きな転機が起きる。これが天正10年、1582年、例の本能寺の変、来年の大河ドラマで主人公となる明智光秀が反旗を翻して本能寺に信長を襲撃したあの事件です。この本能寺の変の時に家康自身がたまたま信長から勧められて堺に行っていたんですね、6月の1日、2日でその2日に本能寺の変が起きました。で、2日の朝、家康はわずか20人くらいの家臣たち、この中にはあの有名な酒井忠次とかね、本多忠勝とかそういう人たちと一緒に堺から京都に戻ろうとしたその途中で本能寺の変の第1報が入ってくる。これが有名な茶屋四郎次郎という京都

の商人が知らせてきます。この茶屋四郎次郎というのが何者かと言うと名前は茶屋という苗字というか屋号ですけども、本当はお茶屋さんではありません、呉服商兼武器を扱う。だから家康とは京都における武器調達の商人としてしょっちゅう行き来があった。しかも懇意にしていたということで、茶屋四郎次郎は家康様の身が危ないということで報告してきます。このときちょっと面白いのは、報告するだけではありませんで、その後の手立てを考えているんですね。茶屋家にあつたお金を全部持ってやってきます。ですから、そのときもし茶屋四郎次郎がお金を持ってきてなければ、家康はどこかで落ち武者刈りにあつて殺されていたと思います。このあとでね、神君伊賀越え、伊賀越えといってますけど、一番大変なのはむしろ近江の甲賀郡の方ですから、私は最近神君伊賀甲賀越えあるいは、甲賀伊賀越えという呼び方をしています。その時茶屋四郎次郎が先頭を行きましてね、途中の村人たちにお金を包んで渡して、これから家康様を通るから、通してくれ、それで無事通ることができた。同じ時に元武田家臣で、その頃駿河を支配していた穴山梅雪さんという人も一緒に逃げてくるんですが、彼は途中で家康と別れまして、殺されてます。だから、家康も茶屋四郎次郎のお金がなければ危なかったなということと、もう一つはですね、その時に堺にいた伊奈忠家、忠次がそこで、お供するような形になります。その結果として、家康の家臣の小栗仁右衛門吉忠という人の同心として認められる形になります。ですから、二度の出奔から、ようやく、三度目の正直となりますが、家康の家臣に迎えられたというのが、天正10年、1582年ですから、忠次はその時点ではもう33歳ですね、ある程度の年齢にはなっていたということになります。

織田信長は武田を滅ぼしたあと武田領国だった甲斐や信濃、上野、そういったところに自分の家臣を送り込むんですね。ところが、信長という人はやっぱりちょっと潔癖症と言うか、「自分に敵対したところの家臣は使うな」という命令が出されたという史料はないんですけども、いろいろ状況を見るとどうも元武田の家臣は採用してません。ということで、その甲斐・信濃・上野は元武田家臣がある意味では住んでたんで

すね、帰農という言い方をします。農に帰る。武士は当時は兵農未分離ですから、武士の身分がなくなっても農民としてやっていけたということで、村々に住んでた。ところが、本能寺の変で信長が殺されたという第一報が入るとともに彼らが一斉に蜂起いたしました。私どもこれを武田遺臣一揆、残された家臣の一揆という言い方をしたりしています。これによって、たとえば、甲斐一国を支配していた河尻秀隆という信長の家臣が殺されています。それからあと、信濃あるいは上野なんかをもらっていた家臣たちが、命が危ないっていうんでみんな逃げていった。と言うことは、甲斐、信濃、上野が空いたんですね。そこに目をつけたのが家康です。なぜかという、もう秀吉が明智光秀を討ってますので、信長の後を継ぐって事はちょっともう可能性が低い、となるとむしろ自分の力を蓄えようということで、具体的には駿河から甲斐・信濃に攻め込んでいきます。このとき同時に相模、いまの神奈川県から同じく甲斐・信濃に攻め込んで来たのが、北条氏直、北条氏政の息子で五代目です。そこで、甲斐で、二人が対峙するんですね。その対峙状況がしばらく続いた時に、家康から言い出したのか、北条側から言い出したのかちょっとわからないんですが、「ここで二人がいがみ合っていると損だ」要するにほかの連中がどんどんこっちに拵けてきますからね。越後の上杉景勝なんかも南下してきましたから。「ここで争っている場合じゃない」と言うことで、国分けをします。家康が甲斐・信濃、北条氏直が上野、いまの群馬県のほう取るということになりました。ということでお互い手を打った。ですからなんと家康は、それまでの三河、遠江に信長が武田を滅ぼした直後にもらった駿河、それに今度の信長死後の二か国奪取ということで、私どもよく駿遠三甲信という駿河・遠江・三河・甲斐・信濃、この五か国の大名になります。

五か国の大名になったころから実は、伊奈忠次の目を見張るような活躍が見られるんですね。それが、レジュメに書きました天竜川左岸の治水と開発。当時やっぱり武将たち治水、国を治めるには水を治めるのが必要だ。今回のいろんな各地の台風被害あるいは大雨被害を見ている、やっぱり治水っていうのがいかに大事かということ改めて身を持って感じるものが

できたんですが、家康もやはり駿河・遠江・三河・甲斐・信濃の五か国を支配するに当たって、俗に「暴れ天竜」というあだなとか名前が付いてしょっちゅう荒れるんですね、氾濫するんです。そこをまずなんとか抑えなきゃということで、天竜川左岸の治水と開発ということで伊奈忠次がその任務を負うことになりました。例えば寺谷用水という、天竜川から水を引いてそれによっていわゆる新田開発をしていくそういったところが出てまいります。ですから、治水と利水、新田開発なんかもその利水のほうですけども、そういった形で成果をあげていくということになります。このあたりで伊奈忠次の地方支配と書いて「じかたしはい」と読みます。よく「ちほうしはい」と読み間違える方がいるんです。地方、これは、その土地を支配する、地方支配で成果をあげていくということになります。それから、もう一つが有名な五か国総検地、「熊蔵縄」というあだながついてます。伊奈熊蔵ということで伊奈忠次が縄を使って検地をしたっていうんで、検地は縄うちなんていう言い方もしています。これは天正17年です。1589年ちょうどこの頃になりますと、家康の五か国支配が安定してくることになるんですが、この五か国総検地は実は、秀吉の太閤検地と同じ時期なんですけれども、秀吉の太閤検地とはちょっと違うやり方をします。ということは、確かにこの時、秀吉の軍門に下ったことにはなあって、秀吉を主人と見ている家康ですけど、やっぱり自己主張があったんでしょう。太閤検地とはちょっと違うやり方で五か国を検地しています。それとあわせて、天正17年の定書に例の郷中定書。これが七か条ありますので、私どもは「七か条の定」という言い方をしています。これを五か国領内に出すわけです。その一番多く出した人が伊奈忠次なんですね。これは今日このあとシンポジウムで司会を務めます和泉先生が『伊奈忠次文書集成』という史料集を出されていますが、この中で、ぱらぱらめくっていくと、殆ど伊奈熊蔵、書面の名前はこの頃は家次と名乗ってますので、家次ですけども、これがほんとにもう群を抜いて多いです。この七か条の掟書というのはどういうものかというレジュメに一例として篠ヶ瀬次郎二郎左衛門宛の文書、これはいまの静岡県の文書を一通だけ入れてまいりました。

「一 御年貢納所之儀」云々と書いてありますが年貢納入のことにあります。それから、二条目では「陣夫」これは 200 俵に一匹、一人ずつこれを出すべしというのが、このような形で、戦いのときに農村から兵を徴収する、そのやり方あるいは、三条目では百姓屋敷分百貫文に三貫文ずつどうのこうのということと、四条目、五条目に四分一はって出てくるんですけどね、これは四分一人足役という今川の系譜を引いています。四分一役。そういったそれ以前の領主のいいところも取り込みながら、自分達なりの工夫をしながら、そうやって五か国を安定的に支配するというシステムをこういう形で領内に出していった。だから、言ってみれば、五か国支配の中心的役割を担っていたのは伊奈忠次なんですね。ですから、武将というみなさんすぐいわゆる武功派、例えば酒井忠次とか本多忠勝、榊原康政、井伊直政そういった、いわゆる徳川四天王と呼ばれるようなそういう武功の武将たちだけではない。もちろんそういう武功派の人達によって家康は戦いに勝っていったわけですが、戦いに勝って広げた領土、得た土地をいかにして支配していくか、効率よく支配していくかということが大名、五か国を支配する家康にとっては大事だと。その一翼を担ったというか、一番役割を果たしたのが、伊奈忠次だったということが言えると思います。

このころの家康と秀吉の関係は実はちょっと微妙でして、ご承知の方多いと思いますが、最初は本能寺の変のあと、家康はすぐには秀吉に頭下げません。なぜかっていうと、秀吉はご承知のとおり信長の家臣ですから、いま風な言い方をすれば織田信長株式会社の家老の、まあ、重役の 1 人ですね。それに対して家康は信長の家臣ではない。言ってみれば、織田信長株式会社の子会社の社長です。だから、本社の重役と子会社の社長とどっちが偉いかというと甲乙つけがたい。だけど、実際問題として秀吉がぐーとのぼしていった。織田家を篡奪していったということで、最初のうち家康はおもしろくないですね。なんであの秀吉に頭下げなきゃいかんのだということで突っぱねます。その突っぱねた具体的な動きの一つが天正 12 年の有名な小牧・長久手の戦い、小牧・長久手の戦いは家康と織田信雄、信長の次男です。これと手を結び、秀吉と戦う。

このとき実は局地戦では家康方が勝ってるんですね。有名な長久手の戦い、これでは家康が勝ってるもんですから、家康も「簡単に秀吉に頭を下げないぞ」という思いでいたんですが、秀吉の方は、よく人たらしの天才なんて言い方をしますように、相手をたらしこむという。実力ではちょっと家康を屈服させることはできないけれども何とか打破したいということで、家康と手を組んでいた織田信雄と単独講和を結んでしまいます。そうすると、家康は織田信雄を助けて秀吉と戦いに入ったわけで、はしごをはずされちゃった感じ。結局、家康もこのとき「しょうがないね」ということで講和を結びます。ただ講和を結んだだけで、家臣になったわけではなかったんですね。ところが、秀吉のほうは秀吉のほうで、家康を取り込まないと自分が描く天下統一は夢で終わっちゃう。ということで必死になって考えて、なにをしたかということ、自分の妹、朝日姫というんですが、ただ、もうこの頃 44 歳ですから、姫と行ってたかどうかわからないんですが、とにかく自分の妹、既に他家に嫁いでいったんですが、それを強引に離縁させる。それで、先ほどの天正 7 年に家康の正室築山殿が殺されてましたから、正室として送り込んできました。そうすると、家康もこれ以上突っぱねるとまた戦いになるなと考えた。その時点ではもう秀吉の力がぐっと大きくなっていますから、ここで戦っても勝ち目はないということで、あきらめて大坂城へ出て行って頭を下げることになりました。これによって家康を味方に付けた秀吉がますます力を付けてきた。

とうとう天正 18 年、例の小田原攻めを迎えるわけです。といいますのは、最初は先ほどお話しました北条氏直と徳川家康が甲斐・信濃を取り合っているときに「これ以上戦っても他の連中が得をするから、ここは手を打とう」ということで、手打ちをやったわけですが、そのときに家康の娘が北条氏直に嫁いでるんです。ですから、家康としては北条家とは同盟関係にあったんですね。その北条家が秀吉におとなしく頭を下げていれば話はちがったんでしょうが、北条家の方は北条家の方でなにも秀吉の軍門に下るいわれはないということで突っぱねます。そこで、間にはさまって困ったのは家康ですね、要するに自分は秀吉の妹

と結婚している。同盟というよりは、もう完全に家臣になっちゃった。一方、自分の娘が北条氏直に嫁いでいる。北条と同盟関係にある。だから最初のうちは家康も何とか北条氏政・氏直親子に「ここはちょっと曲げて、秀吉に頭を下げに行ってくれよ」ということを言ってるんですが、北条のほうは突っぱねます。最終的に、これ文書に残っているんですけどね、家康から北条氏政・氏直親子に宛てて、もし秀吉のところへ挨拶に行かないならば、自分の娘、徳姫といいますが、返してくれ、要するに離縁してくれということまで申し送ってます。その文書が残ってます。その頃から家康は北条はもうだめだ、切らねばということで、秀吉一辺倒になっていきます。その前の年です。天正 17 年にこれもご存知の方多いと思います。上野の名胡桃城、いまの群馬県みなかみ町の名胡桃城という城に真田昌幸が入ってたんですが、それを北条側、鉢形城主北条氏邦の家臣、猪俣邦憲という人が攻め取る。これをいわゆる惣無事違反と言います。秀吉がある段階から諸大名たちに対して私戦をやめさせる。これが関白としての自分の役割なんだということを前面に打ち出して、それを押し付けてきました。それに違反するのは「俺が征伐する」ということで、実際天正 17 年の 11 月、その事件が起きた直後、北条側にいわゆる最後通知、「討伐するぞ」という、いわゆる宣戦布告をいたします。天正 18 年の 3 月、豊臣軍の大軍が小田原攻めに向かっていきます。このときに武将達はみんなついてくるわけですけども、徳川家康の当時 3 万が、秀吉軍の先鋒として、小田原攻めに向かってゆきます。このとき秀吉軍は総勢 21 万とも 22 万ともいわれる大軍で攻めるわけですけども、北条の小田原城もなかなかの名城というか堅城でして、簡単には落ちないんですね。その落ちないところで、秀吉の軍師、黒田官兵衛が単身乗り込んで行って、「そろそろ頭下げたらどうだ」ということで降伏勧告をして、北条氏直が「わかった城をあける」ということで戦いが終わったわけです。そうしますと、ここで論功行賞が発表されます。そのときに秀吉が家康に対してそれまでの五か国を没収という言い方はしなかったと思いますが、五か国に変えて北条の元所領だった関八州を与える。数の上で、五か国から八か国だからプラスですよ

ね相当。ただ実際、そのころの関八州といっても安房にはまだ里見氏があります。それから常陸には佐竹氏があります。だから完全に八か国領有していたわけじゃないんですけども、ただ、北条の遺領を家康がもらうということになりました。それで家康は居城をどこにするか、考えるわけですね。その時、いろんな史料があるんですけど、家康自身は、最後、小田原城が無血開城、つまり、全然損傷なしで、北条が手を上げ、降参したものですからそのまま小田原城に入るつもりでいたようです。だけど、「小田原よりもっと東に江戸と言うところがあつてそこがいい」ということを秀吉が言ったんだというのがこれまでの通説です。ですから、江戸を選んだのはなにも家康の意思ではなくて、秀吉の助言だったというか、要するに、私の解釈ですが、秀吉も家康はやはり家臣にはなつたけれどちょっと心配なところがあつてできれば遠ざけたい。よく敬遠という言葉がありますが、敬して遠ざける。そういうつもりで、秀吉は家康を小田原じゃなくて遠くへやったというようなイメージがあります。その通説に対してむしろこの時、「小田原よりも江戸の方がこれからの領国経営にはいいんじゃないですか」と言ったのが伊奈忠次。つまり忠次の進言によって城の本拠地を駿府から江戸に移したんだという解釈もあるんですね。このあたりはこのあとの門井先生のお話で出てくるかも知れませんが、私自身はその可能性があるかなというふうに考えています。そのときそういった形で、城を江戸に移した。従来の理解だと「江戸は寂れた漁村で全く何もなくてお城を作った」という言われ方してはいますが、やっぱり江戸城は有名な太田道灌が、最初に城を築いていた場所でもあるし、そのあと、場所はたぶんいまの江戸城のそこだと思いますが、その後、北条氏も江戸城内、遠山だとか富永だとかそういう人を置いて支配していますので、結構重要な北条側の拠点のひとつではある。北条氏の家臣団名簿とっていい通称「小田原衆所領役帳」。これは、一枚目の表紙が小田原衆だったから、その本全体が小田原衆という名前がついちゃったのですが、本当は「北条氏所領役帳」。つまり北条が支配している土地のいろんな、地域の家臣団にお前は何か貫与えるからということで書いた。所領役というのは、

そのもらった貫高に応じてたとえば軍役ですね。戦いのときに何人出すとか、あるいは築城工事のときには、人夫を何人出すとかそういったルールというような決まりを決めていますけど、その台帳になるようなものを作った。その中にもう既に、江戸衆というのがあ
るんです。だからこのころの永禄2年1559年の段階ですけれど、三代目北条氏康のときには、小田原衆、それから伊豆衆というのはこれはいまの韮山の方ですね、そのほかいろいろな家臣団があるのですけれども、そういった中の一つにも既に江戸衆というのがありますので、当然それを地域に、そんなに大きな城ではないし、そんなに大きな街ではないんですが、江戸という城と多少の街はあった。その後新たに家康自身城作りから、街づくりから始めていくということになったのですが、天正18年の、家康の関東転封ということになります。そのあたりで、大名たちの石高があ
がっていきます。このとき関東で、一番家臣でたくさんもらったのが、井伊直政ですね。一昨年「おんな城主 直虎」の最後の方にずいぶん出てきました。叔父さんの井伊直盛の子供ちょっと複雑になりますが、直親の息子ですけれども、まあその井伊家の跡を継いだ井伊直政が家康の家臣としては若いですが、一躍、上野、群馬県のいまの高崎市になりましたが、箕輪城これをもらっています。これがなんと12万石なんですよね。さっき名前を出した本多忠勝が10万石、榊原康政が10万石で二人とも井伊直政よりも歳ははるかに上なんで、一番若い直政がなぜ一番高くなったかは、よくわからない。そして、もうひとつおもしろいのはその井伊直政に武田が滅びた後、家康はですね、武田家臣を大量に雇い入れます。まあこのあたりが信長との違いですね。信長は自分に敵対した者の家臣は雇わない。だけど、家康は能力のある者は雇うよ。ということで、例えば今川を滅ぼした時も今川の家臣を大量に取り込んでいます。だから、武田を滅ぼした時も大量に取り込んでいます。その中には有名な、伊奈忠次なんかと一緒に仕事をやっています大久保長安。彼なんかは武田の家臣です。そういった人たちを多く取り込んで、井伊直政はこの時、元武田の家臣の800人が家康の家臣になった者のうち、74人を受け入れた。その74人のほとんどがいわゆる赤備え。武田最強と

言われた。赤の軍団だったんで、それでその後、井伊の赤備えとなった。だから、家康がなぜ一番年が若い井伊直政を特別にトップの12万石にしたのか。武田の精鋭部隊、赤備えをなぜ井伊直政につけたのか、なぜ特別に井伊直政をかわいがったのかちょっとよくわかりませんが、いずれにしても、そんな形で関東に諸大名が入ってきます。だいたい多くは2万石、3万石ですけれどね。そして、この足立郡の小室を与えられたのが伊奈忠次、1万3千石、あるいは1万石とも言っていますが、そこで陣屋をつくるわけですね。これがいまの伊奈氏屋敷跡になっています。この時期、彼らは、いわゆる代官頭のような人たちによって、この直轄地、要するに家康はですね、関八州、与えられた時の石高が240万石ぐらいですね。10万石は別なところで合わせて250万石と言われてます。その250万石のうち10万石とか5万石とか家臣たちに与えるんですが、残った部分、いわゆる直轄地、直領とかあるいは天領的なものになるのですが、これが約100万石になります。それを伊奈忠次、大久保長安、彦坂元正、長谷川長綱、こういった代官頭たちがそれを支配、運営するということになっていきます。ですからそういった意味でいう、彼らが村々をちゃんとおさえて、年貢をちゃんと取るしということこれで正に江戸幕府の初期の支え、経済的にも支えるということになりますので、レジュメに書いてあります。まさに礎をつくったということになる。私はやはり伊奈忠次で注目しているのは、忠次の治水事業です。おそらくこれが三河あるいは遠江支配時代、やはり三河、遠江にも主な河川、三河にはそんな大きな川はそんなには流れてない。豊川とかね、そういうのは流れてますけど、やっぱり遠江、先ほども名前を出した天竜川あるいは遠江と駿河の境に大井川という大きな川が流れてる。そして、五か国時代になるとさらには安倍川とか富士川とかそういったところの築堤方針、そういったところに力を発揮することになるんですけど、現在富士川には伊奈忠次が関係した堤防の跡が残ってます。これを備前堤といい、川の勢いを弱める棒出しの役目をしています。そういった甲州流の築堤もちゃんと残ってる。いま、私、甲州流といいました。山梨県にいきますと、いまの笛吹川の流域に信玄堤という

名前だけでなく堤防も残っています。信玄がやはり治水の技術をすごい持ってて、おそらく家臣たちも治水技術を身に付けていて、その中の1人に大久保長安もいた。大久保長安というと皆さんすぐ石見銀山、金山銀山の開発者という風に思われるかもしれませんが。彼もやはりそういった意味では、土木水利技術を身に付けていた。ですから私は、伊奈忠次という人はいわゆる武将なんだけれども、むしろいま風の言い方をするとテクノクラート、高級技術官僚といいますかね、そういった人物だったんじゃないかな。そういう人物がいないとやっぱりちゃんと川を整備できない、水を制御できないということになりますので、先ほど町長の話にもありましたが、まさに利根川を、もともと江戸湾に流れ込んでいたのを銚子の方に流れを変えていく。それから、いま申しました富士川でのこととか、五か国時代の天竜川の左岸治水工事、そういったものにすごい力を発揮した。これが伊奈忠次だったのではないかな、とそんな感じがしています。で、もう一つやはりこの頃からわが国のお米の生産高がぐっとあがってくるんですよ。慶長3年、1598年ですね、秀吉が亡くなった年でもあるんですが、同時に秀吉が始めた太閤検地が終わった年です。現在、慶長3年検地目録ということで、全国の検地が終わった石高が算出されています。それをみると結構武蔵国というのは石高が高いんですね。ということはどうも天正18年に家康が関東に入ってきて、そこで、伊奈忠次たちのこの治水工事のおかげで新田開発が急速に進んだ。その成果、これが現れたんじゃないかというふうに思っています。いわゆる私も何々堤、武将で名前がついているのは、先ほど言いました信玄堤、それから、九州へ行きますと、熊本に清正堤なんていうのがある、加藤清正。この加藤清正という人も俗に築城の天才、そして土木の神様なんて言われ方していますが、武将でそういう能力を持った人がいたということだけではなくて、加藤清正を例にとると、二人家臣にそういう土木技術者がいたんです。飯田覚兵衛と言う人と、森本儀太夫。飯田覚兵衛は2年ちょっと前になりますか、熊本地震で、熊本城が大被害を受けましたと。そのとき一本の石垣でかろうじて一つの櫓が残ってて、覚えてる方、映像は私はもう何度見てもちょっと涙するくら

い。あの櫓は飯田丸、飯田曲輪とって、そこに住んでいたのが飯田覚兵衛という加藤清正の重臣なんですけどね。そういう土木水利に長けた人を加藤清正は家老にしている。だから、私は、加藤清正自身はそんなに土木水利築城の能力があったというよりむしろ、有能な家臣を抜擢して、重職につけてということではないかなと思っています。ですから、おそらく家康も伊奈忠次を、「なかなかいい仕事をするな」ということで見ていたと思うんですけども、ただやはり戦国の世ですから、むしろ戦いで目立った軍功を上げたものが、やっぱり石高は多いということになります。その一つの例、これも有名なエピソードなんですけれども、家康の懐刀などといわれた本多佐渡守正信が最終的には2万石もらうんですが、さっき名前を出した井伊直政とか12万石ぐらい与えても良いんですね、だけど、これはやっぱり当時の武将たちの一般的な観念で、命を張って、つまり戦いで手柄をたてて、要するに戦いの場でいつ死ぬか判らないその代償として石高はたくさん出す。だけど、裏方で、つまり縁の下で働いているものについてはあんまり見えてないもので、石高はあげないというのが、家康なりの考えですね。しかも伊奈忠次のように本当にすごい能力をもっているいろいろバリバリやると周りからちょっと嫉妬されるんですね。ということもあって、仕事はしてもらいけれども、あんまり石高は上げれば妬まれる。これはいみじくも本多正信が言っている言葉なんですけど、本多正信の記録ということで残ってる。どんな言い方しているか、「権あるものは禄少なく」、権限というかまあ、権力ですね。それがあつたものは石高は少ないほうがいいという言葉なんです。それを息子の本多正純にもいってたはずなんですけれども、その本多正純の方は、親の言っていることはちょっとどっかへ行っちゃったらしく、宇都宮15万石に抜擢されちゃった。それが、宇都宮釣天井事件ということで、失脚していくことになる。伊奈忠次も家康としてはもっと10万石ぐらいあげてもよかったと思ってたかもしれない。だけど、やっぱり、裏方でいい仕事をするものはあまり表では目立たないという風に、特に扱ったというか、そういう待遇をしたんじゃないかと思っております。そんな形で、伊奈忠次はまずは新田開発に力を

入れているということと、もう一つ交通制度の整備です。これは、ご承知の五街道、東海道だとか、中山道だとか、日光街道とか、奥州街道とかありますけれど、そういったものの整備にかなり能力を発揮して、それらがやはり、この江戸時代の初期の全国的なネットワーク作りこれに大きく寄与しているということとは間違いない。ただ、そういった意味では、伊奈忠次という人が、戦いの場ではそんなに手柄を立てるような武将のタイプではなかった。ちょうど、豊臣政権でいうと福島正則、加藤清正たち武功派と石田正澄、石田三成、増田長盛、長束正家そういった奉行派ですから、どうもその同じ分け方、家康の初期にもあるという風に考えていいじゃないかと、ですから、井伊直政、本多忠勝、榊原康政、それにもう1人酒井忠次を入れて徳川四天王という言い方してますが、私は四天王というふうにはほんとに言ったのかなと疑問符を付けているんです。なぜかという、同時代の家康が生きていた頃の史料には四天王という形では出てこない。むしろ後から出てくる。しかも、酒井忠次と本多忠勝たちは世代が違うんですね、活躍した時代も違います。だからまあ、俗によく三羽鳥なんて言い方しますが、その三将はいいんですね。井伊直政、本多忠勝、榊原康政は一緒になって戦いに出てる。だけど、酒井忠次はちょっと別格なんで、それをプラスして四天王というのが、あとで、誰かが作ったというか、考えついたネーミングじゃないかと思っているんですけども、そういった武功派とは違う。ここに名前を出した、伊奈忠次、大久保長安、彦坂元正、長谷川長綱これらは、いわゆる豊臣政権でいうと五奉行の連中にあたるわけです。そういった人たちの働きがないとやはり政権はうまく回っていかなかった。そういった意味では家康を陰で支える。その伊奈忠次の役割というのは非常

に大きかったという風に考えております。

最後に、最近論文を読んでいてびっくりしたんですけども、新しい研究が出てきてますね。どういうことかという北条早雲ですね、伊勢宗瑞、その北条早雲に家臣で、伊奈弾正忠盛泰という人がいる。その北条早雲の家臣の伊奈氏と今日お話しました代官頭になっていた伊奈忠次の伊奈氏とどこでどうつながってくるのか、あるいはつながりがないのかというところを今後もう少し深めていかなければいけない問題だと思います。少なくとも北条初代、早雲の時代に伊奈を名乗る有力な武将がいたということも今後もう少し深めていく必要があるんじゃないかなというふうなそんな感じで思っております。実はこの北条早雲に仕えた伊奈氏はいわゆる奉公衆、奉公衆というのは守護の家臣じゃないんです。將軍直属です。来年(2020年)大河ドラマの主人公の明智光秀の明智家も実は奉公衆なんですね。美濃の城、土岐氏に後になって仕えますけれども一時は幕府の奉公衆でした。そういった意味でも、奉公衆伊奈氏と代官頭になってくる伊奈忠次の伊奈氏とどうつながるのか、というのは私ももう少し研究したいなと思っております、これからの一つ大きな課題ではないかと思っております。ということで今日は、この後ですね、シンポジウムに話題提供というか問題提供というような形でお話させていただきました。このあと和泉先生の司会で、私も伊奈忠次というほんとに和泉先生の本、論文で勉強してきているので、今日はその話も聞けるかなということで、喜んで参りました。1時間ということで話させていただきました。長時間ご清聴ありがとうございました。

門井慶喜氏講演

ただいまご紹介にあずかりました作家の門井慶喜でございます。これから1時間ということでお付き合いをお願いします。小和田先生の大変立派な講演を私も一番前の席で聞いておまして、私自身がむしろ伊奈忠次という人について、勉強させていただいたという感じでございます。私、今日はどういう話をさせていただこうかなと思ひまして、伊奈忠次とその時代というふうに題してはいるんですが、ここでもう一度伊奈忠次という人物について申し上げても、これは小和田先生みたいに立派なお話になりませんで、そういうこととは別の伊奈忠次という人の研究というかちょっと考えてみたい。

いま、小和田先生は最後の方で治水、伊奈忠次については治水という要素が非常に重要であるというふうにおっしゃいました。これはまったく私も非常にその通りだと思っております、賛成でございます。従いまして、私もむしろそういう日本史における治水というということをもう一度考え直すことで伊奈忠次という人は、この日本史の中でどういう役割をしたのか、あるいはどういう位置づけができるのかというようなことを考えてまいりましたので、それについてお話をしたい。その時代と言いましたけれども時代が長いです。古代から近代というふうにできればお話をしたいなど。要するに日本史全部でございますね。時代も何もないんですけれども、そういう長いスパンで考えて、伊奈忠次という人はどういう人だったかということを考えていきたいと思ひます。

その前にちょっと私の個人的な話をさせていただきますと、実は私、大阪に住んでいるのですけれども、今日ここに参りまして、非常になんとなく懐かしい風景だったんですね。と言いますのも私の父が実は吹上の出身なんです。御存知の方いらっしゃいませんか。当然実家が吹上にありますので、ちょくちょく吹上には行っていた訳で、そういうところを覚えていたわけでそういう風景をいまちょっと再び見たような感じがあって、そういう懐かしさかなと思ひます。したがって、私の体を通る血の半分は北足立郡の血でございます。これは本当でございます。そういうご縁

で呼んでいただいたわけではなくて、恐らく伊奈忠次のゆかりということで『家康、江戸を建てる』を書いたと、伊奈忠次が重大な活躍をする小説を書きまして、NHKのドラマにしてもらったというご縁だろうと僕は思っております。実はそのドラマ化される前に実は一度撮影現場に行きました。緑山スタジオというちょっと豪華なスタジオに行きました。伊奈忠次役の松重豊さんにもお目にかかっています。実物の松重さんはすごく背が高い。僕は178ですが僕よりも背が高いくらいなんです。NHKのセットはご存知のとおり非常に厳密に時代考証しますので、セットとはいえ当時そのままのお城の中、一番初期の江戸城の中のセットで見学行ったんですけれども、そういう本物そっくりのセットなんで鴨居が低いんです。当時の人の日本人の身長にあわせてありますから。それで撮影をしている時は座るシーンですから、撮影が終わって「はい、原作者さん、あがっていいですよ」と言われ、上がっていった時に松重さんがお立ちになった時に頭の上半分が鴨居で見えないんですね。家康を演じた市村正親さんもおられて、ニコニコと僕に「昔にこんな大きな奴はいないよな。大きくないよな」と、失礼ですが、お茶目なそういう家康さんにもお目にかかってまいりました。

まあそんな感じで撮影行きて、佐々木蔵之介さんもいらっちゃいました。第1話の主人公、第1話の水を制すという題なんです。佐々木蔵之介さんもいました。佐々木蔵之介さんは大変な読書家です。僕のキャスティングが決まる前にその『家康、江戸を建てる』出演が決まる前にすでにその作品を読んでもらったみたいで、撮影の合間に佐々木さんが本を持ってきてくださって「門井さん本読みました。サインください。」とおっしゃるので、僕は「喜んで」と言って、「門井慶喜、佐々木蔵之介様へ」と書いて、「はいどうぞ」と渡したら、家に帰って奥さんに「なんであんたもらわなかったの」と「逆じゃない、その時言えば断られることはないじゃない。もらってくればよかった」と、言われたという話を後になってプロデューサーの方に話

したら、佐々木蔵之介さん、市村正親さんから松重さんからはじめすべてのキャストの方の寄せ書きのサインをつくって一枚一枚、一人一人にとって僕に送ってくださいって、いまでは家の家宝となっています。

その第1話、第2話、2夜連続だったんですけど、第1話が「水を制す」というタイトルでした。これは僕がつけたタイトルではなく、NHKの方で、ドラマの方でつけたタイトルですが、内容としてはまさしくそのとおりでございまして、伊奈忠次が出てくるのは第1話ですが、「水を制す」、水というものを人間がコントロールする、これは実に良い題名だなと思うんですけども。実はこの発想が生まれてきたのはどうも伊奈忠次の江戸時代の初期、もしくは戦国時代の末期と言っても良いかもしれない時期だったような気がします。これは僕の想像を交えながら言うですけども、もともとこのあたりの話の本題になっていくのですけれども、もともと日本人というのはそれ以前には「水を制す」、「水をコントロールする」という発想はあまりなかった。なぜかという、水の方が強かったからです。水の方が圧倒的に人間を制した。

僕はさっき大阪にすんでいると申しました。大阪府の寝屋川町、そこには「マッタノツツミ」というのがあります。マッタという字は茨城県の茨という字にたんぼの田を書いて「マッタ」という。昔の仮名遣いでいうとマブタというふうに書かれますが、地元の人にはマッタと呼びます。いまの人が作った碑が淀川の堤防の近くに残っているんですね。それはどういう堤防かっていうと、ある意味日本最初の堤防なんです。日本書紀に出てくる話でして、非常に非常に昔に出てくる話でして、天皇でいくと仁徳天皇です。もうすごい昔ですね。その頃にこういうことがあったと日本書紀にでてくる、とにかく、茨田堤というものを作ったと。それまでは暴れ川ですから何度も何度も人々に迷惑をかけていたので、大築堤工事を行った。そこで二人の人間がいわゆる人柱になることになった。つまり、川に飛び込んで命を捧げちゃう。その命を捧げる代わりに「神様よ、もうこの川を2度と暴れさせないでおくれ」という発想です。人柱。2人おりまして、1人は武蔵出身のコクビさん、首が強い、首がこわいとい

う言い方、筋肉質という意味でしょうね。武蔵出身のコクビさん、そして、茨田出身のコロモコさん、衣ってというのは着物という意味の関係があるのでしょうか。最初言っていたコクビさんは、「人柱に選ばれたからしょうがない」、とって嘆き悲しみながら飛び込んでしまった。そしてもう一人の、茨田出身のコロモコさんは考えてみます。「おい」と川の神さまに呼びかける、「俺はいま、ひょうたんもっているから、ひょうたんを投げて、もし本物だったら、ひょうたんは沈むはずだ。お前が偽物だったら、浮くはずだから、俺は人柱なんかにならないよ。」と言った。ポンと投げたら浮くに決まっているじゃないですか。ひょうたんなんだから。「浮いた。お前は偽物だな」と言って、人柱になることを免れた、という逸話があります。どうしても、上方中心といいますか、西日本で書かれた話ですから、関東出身、武蔵出身のコクビさんが、ちょっと損している印象になっています。つまり、そんなエピソードが残っているくらい日本書紀という、国の正史に残るくらい人柱って当たり前だったんです。川に対して人間ができることはこれくらいしかないとまでは言いません。もちろん、現実問題として茨田堤を作っていたわけですからちゃんと堤防を作ろう、作れるそれなりの技術はあったんでしょうが、やっぱり、川の方が圧倒的に強かったわけですね。言ってみれば人柱が一番有効だったと、日本史とはそういう時代から始まるわけです。

これはある程度時代が下がっても変わりません。これはものすごく有名なことですが、時代は下がりますと、藤原氏の天下、道長さんがすごい栄華を極めたその後には白河天皇という人が天皇さんになりまして上皇になって、いわゆる院政というものをしていきます。院政最初の人、この人がすごく、天皇というトップの位置にいながら、上皇になって、言ってみたら行動の自由がつくわけですから、それでいながらさらにすごい権力を持ちちゃう。他にいうこと聞かせられる人いないと。もう晩年でも上皇で時代にはそれ以上の権力者はいない。その白河天皇でもどうにもならない、天下三不如意がありまして。3つの不如意、どうにもならないこと、賀茂川、双六の賽、山法師。つまり、双六の賽はしょうがないですね。サイコロですから。山

法師っていうのは比叡山の僧侶、比叡山に住んでいる、集まっている。これは、坊さんというか、実際は兵隊さんなんですけれども、これも当時は非常に力をもっていましたからこれも言う事はきかせられない。もう一つは賀茂川なんですね、しかも不如意の最初に来るわけです。いま賀茂川といたら、京都に旅行に行ったら、さらさらときれいに流れる川です。岸の片側から「おーい」と呼べば、もう片方の人が「なんだー」と言えるくらい細い川なんですけれども、当時は大変な暴れ川でした。雨量にもよりますが、蛇行はするわ、河川敷はでかいわでとにかく流域面積もすごく広いですし、しかもご存じのとおり京都はすぐ北が山ですから、山で雨が降るとさえぎるものがないですから、滝のようにどーんと落ちてくるわけです。ですからしばしば、賀茂川は凶暴な面を見せた訳で、白河天皇ですら、白河上皇ですらどうにもならないということだったわけです。結局、逆に言って、京都というのはそういう川というものの凶暴性、どうにもならないその性質をむしろ活かしたという側面もあります。つまり、もし外的とかと戦争になった場合にそういう川というものの強力な一種のシールドと言いますか、バリアと言いますか、防御壁になって、敵は入ってこられない。そういうことも考えて、桓武天皇は京都に決めたのではないかというような感じもいたします。とにかく、日本の川の原風景というのはまさにそういう暴れ川だったわけですね。

今年の夏、三ヶ月くらい前ですが、ロシアに行って参りました。ロシアのハバロフスク市に行きまして。シベリア鉄道で行ったんですけど。アムール川っていう川が流れています。いまもちょっと小高い所に登って展望台みたいのところから一面見渡すことが出来る場所があります。我々の感覚からしたら川ではなく湖とか、ちょっとした海くらいのそういうものです。とにかくでかい。対岸も見えない。水は濁っている。なぜかという流れは速くないですね。もともと大陸の内陸部に入ったところなんですね。緯度でいうと日本の北海道、樺太くらい、夏に行ったらすごく涼しい所でしたけれども。とにかくゆったりとしたものすごく幅の広い川がゆっくりゆっくり流れているというのがおそらく大陸の川の原風景です。こういうところ

では、もちろん、治水の必要がないとは言いませんけれども日本の方がはるかに大変なわけですね。距離が短いかもしれませんが、その分、急流でガーといくわけですから。それが蛇行なんてしたら大変なことになるわけです。日本の川は、そういうものであり、だからこそ、古代のさっき言ったコワクビさんとかコロモコさんとかどうにもならない。白河上皇もどうにもならなかったという時代が長く長く続いたわけです。

それがようやく変わってきたかなあと、いうふうに今日の目から見て思われるのが戦国時代だったんですね。さっき、小和田先生が加藤清正の話をなさいましたけれども、僕も話そうとしたんですけど、先に言われてしまいました。まさにそういうふうに治水をする。わかりやすく言えば信玄堤を築いた武田信玄もそうなんですけれども治水をする。川の流れを整備する。氾濫しないようにする。ということがそのまんま、一種の領民の人気のつながるわけです。当然、命が助かる。氾濫しなければ逃げなくてもいいとそういう問題もありますし、あるいは耕作面積が増える。新田開発することができますから米がたくさん獲れる。お腹いっぱい食べられる。そういうこともあります。それまでは、源平の戦い、源氏と平氏の戦いでも言ってみれば、武士と武士がやっている名誉の戦いですから。庶民がそんなに重みがあるとか関係があるという話ではなかったですけども、戦国時代になると、そうも言ってもらえない。例えば、自分の国や自分の村が別の殿様に乗っ取られちゃう。税金がたくさんとられてしまうかもしれないとか。あるいは戦争に駆りだされるかもしれないというような、お殿様の意向がそっくりそのまま自分たちの生活に直結する。それが戦国時代というふうに、僕はそういうふうに思っています。そう言う時代。治水というものは領民の生活に直結するわけです。命が助かるか助からないか、ごはんが食べられるか、食べられないか。そういうものに直結するわけですね。ですから、逆に言いますと加藤清正とか武田信玄というのは、もちろん戦いに強いというのがありますし、負けなかったということもありますが、もう一つ、水を制す。この頃から、そういう発想が出てくるんですね。水を制す。これができた人だから人気があった、そういった面もあると思います。この戦

国時代がだんだん進んで行きまして、群雄割拠がまとまっていくと信長の時代になり、秀吉の時代になり、そして家康の時代になりますと、土木家の伊奈忠次という人が出てまいりまして、これが結局利根川東遷、利根川を東に曲げちゃうという大偉業をもちろん、ひとりでやったわけではないですけど、そういうものが伊奈忠次の時代にできると、いうようになってくる。この時、どういう土木技術を使ったかというのが、『家康、江戸を建てる』という本を書く時に実は大問題でございまして、小説だから書かなくても、話は成立することはするんですけども、やっぱりそれって物足りないじゃないですか。伊奈忠次がいます。徳川家康がいますでもいいですけど、利根川東遷というあんなでっかい利根川をぐいっと曲げちゃった。こんな大事業をしました。どうやってやったのか書いてなかったらやっぱりちょっと物足りないじゃないですか。それはちょっと考えて、僕の想像交じりでも書こう、というふうに思って結局、書いたのは伊奈忠次が甲州流ですね、甲斐の国で学んだことを応用したんだと書きました。具体的に言いますと、たしか聖牛(ひじりうし)というものを書いたと思います。聖牛というのは、一番簡単に言いますと三角錐の形に木を組むわけです。テトラポットじゃないですけど、昔の牛乳パックのような形ですね。三角錐の形に木を組んで、その中に重い石を入れるわけです。石もいろんな網か何かに巻いて入れるわけですけども、川に沈めるわけですが、それ自体は川の水を止めたりはしません。これはいわゆる制水ですね。水の流れを弱めるだけなんですけど。一例としてそういうことを書いたんですけど、これはもともと甲州流であると、武田信玄かどうかわかりませんが、武田家にあった頃の甲斐国で発達した技術であることは間違いない。いまでも、なにに牛、なんか牛なんですね。なにに牛、なにに牛と、いろんな種類の制水装置といますか、木で組んだ制水装置があったようで、場所によって使い分けていたというような、すごく高度な治水技術の発達があったようです。そこは多少の想像力で補いましてそこに書きました。

これが戦国時代、江戸時代初期くらいまでの治水ということになりますけれども、伊奈忠次については最

後にもう一回帰ってきたいと思いますので、いまここで次の時代にいきます。江戸時代中期はどうだったか、家康は死んでしまいました。その後に、家光とか吉宗とかの時代になるとどうなるかといったら、これは日本全国いろんな所に都市が発達するわけですけども、昔からある都市っていうのがありますね。例えば京都というのは江戸時代に発達した都市ではありません。その昔からあります。博多というのもそうですね。古代からあります。福岡の博多ですけども。江戸みたいに江戸時代あるいは江戸時代ちょっと前くらいにできた都市というのは実は日本にいっぱいありまして、例えば新潟なんかそうですね。例えば、長州の萩なんかもそうです。これはみんな海沿い、川の河口、川が海へ流れ出る所に成立している都市なんですね。そういうところは先ほども申しました通り、古代中世は川っていうのは暴れ川ですから、河口付近なんてとてもとても使える場所じゃないわけです。そんなところ怖くて人は住めない。でも、そういうふうに戦国時代から江戸時代初期にかけて、治水技術というのが発達してくると、その治水技術を前提にして街づくりができる。「昔はここに人が住めなかったけれどもいまなら住めるよ」というふうになってくる。その最大の都市が江戸だったわけです。これはご存じの方いらっしゃると思いますけれども、江戸は平らな水の町でした。水というのは物を運ぶのにこれ以上ふさわしいものはないんですね。物が浮く力、浮力というのはすごいんですね。「どんな重い物でも運ぶことができる」ということではないのですけれども。相当な重い物でも少しの力で運ぶことができる。帆があれば風の力で動かすことができる。どっちかという、人を運ぶというよりは物を運ぶ、貨物運搬の方法ということで水路というのが江戸時代すごく発達します。その一方で、もう一つ治水というかこれは利水のほうになるかと思いますが、上水路。これもNHKのドラマでも結構でできましたけれども、上水路の技術の発達もするわけですね。これ要は、治水の応用編です。江戸の場合には江戸から西のほうへずーっと行きまして。20何キロ離れているところ、いまでいう三鷹市、東京都三鷹市に井の頭公園というのがありますけれども、あそこにきれいな泉が湧いている。そこは池に

なっているの、「この水を江戸の人達に飲ませてあげよう」というふうなことで、これも家康の時代に決められたことなんですけれども、延々と水路を作りまして、東へずーっと水路を引っ張ってきて、江戸市中に流して、それを江戸の人々が飲むことができる。それまで江戸というのは海沿いの町ですからちょっと喉かわいたから井戸を掘って井戸水を確保しようと思っても塩水がでちゃうんですね。塩水飲めませんから、どうしようかと飲み水の確保って結構大問題でして、それをこういう 20 何キロ先から持ってくる。当時としては画期的な方法。それまでの日本人ではとても考えつかないような方法で上水路を運ぶことができた。これが神田上水と言われているものです。これはすごいですね。ただ、これをやっているとお流で雨が降っちゃうとか、水量が多くなっちゃうと、ばーって江戸市中に流れてきて大変なことになっちゃうから、これを何とかしなきゃいけないと。水位をコントロールしなきゃいけない。ということで、これどうしたかという、江戸の入り口に大きいプールを作るんです。いまでいうとスイミングプールみたいなものを作った。石のプールを作るんですね。そこに一回溜めておいて、そのプールに水門を作ったわけです。水の出口を作ったわけです。こうしておけば、上流からどんなに水が流れてきても、水門の開け閉め。「今日は水不足だからたくさん開けよう」とか、「今日は水が多いからちょっとだけ開けないでおこう」とか、いうふうに江戸市中に入っていく水量をコントロールすることができるんですね。それは江戸に入る前に堰き止めて、いわば江戸の入り口になっているわけですから、それはいまでも「関口」という地名が残っています。いまの東京都の文京区ですね。文京区の関口という場所はもともとはそういうプールだったのですね。

これは江戸名所にもなっていて、幕末にいたるまでそういう名所絵図みたいな木版の画だったり、木版のガイドブックにもたくさんでています。これがどれだけ当時の江戸っ子の自慢だったかということ示す一つのエピソードがありまして、その関口のプールの近くに、プールというのは当時の言葉で大洗堰といいます。洗堰と言います、水だから洗うという字に、堰き止めるの堰と書いて大洗堰といいますけれども、洗

堰のすぐ横に芭蕉庵というのがあるんです。芭蕉ってあの芭蕉です。「古池や川底に水の音、水の音」ですよ。芭蕉庵という、これがあって、やっぱり幕末の名所絵図では関口の洗堰と芭蕉庵とセットで観光名所です。幕末時代の伝説では、芭蕉自体はずーっとずーっと前の人です。元禄時代ですから家康が死んじゃってちょっと経ったくらいの人ですから江戸時代初期です。いわゆる元禄時代です。ですから幕末の人からいう 200 年位前ですね。伝説の人ですけども、その芭蕉庵が幕末時代に芭蕉伝説というものができていまして、何かって言ったら芭蕉は伊賀出身です。伊賀の国からやって来てここで芭蕉庵のあるところに住んで、大洗堰をいわば監督工事の監督をしていたんだと。定期的にメンテナンスしないとイケないですから。そういう工事の監督をしていたんだという伝説が生まれました。これはいまでも芭蕉庵というのが残っていまして文京区の地区なのかな、江戸芭蕉庵顕彰会とかありますけれども、いまでも残っていますけれども、ところが本当にそこの所に住んでいたのか芭蕉の生涯を調べてみると、どうもそんなことはないらしい。確かに伊賀から出てきて江戸に住みました。それは事実です。いわゆる点取り俳諧の師匠だったんですね。芭蕉さんは。点取り俳諧っていうのは例えばお弟子さんと教え子に「五、七、五これはいいね、これはだめだね、これは三角」とか点数を与えた。それで一種の言葉遊びのゲームのリーダーとして師匠さんであったわけです。芭蕉さんというのは、飽き足りなくて、「点取り俳諧なんてやっている場合じゃないよ。もっと文学的にいかなきゃいけないんだ」というんで、江戸の外れの深川に住みなおして、それでいわゆるわれわれが知る漂泊の詩人というような探求を重ね、そして孤独の中で、弟子はいますけれども、いわゆる優れた高い文学性の高い俳句を生んでいくというような、いわゆる今日の芭蕉になっていくわけですけども。その前に深川に行く前にどうもいたのが日本橋らしいですね。関口でない。じゃあどうしてそんな関口伝説が生まれたというか、どうも日本橋で、長屋の、こういう史料があったのですけれども、これが、完全な伝説というわけではなくて、こういう史料があるって話なんですけれども、どういうことかという、長

屋の世話役をやっていたわけですね。長屋ですから5軒とか6軒とか町民とかそういう人が住んでいるわけです。さきほども申しました通り、その当時の神田上水とか非常によくできたシステムでしてやっぱり水が水路の横だったりとかあるいは、地中から暗渠だったり水道水が流れたりするわけですけども、やっぱり1年に1回は浚えなきゃいけない。いわゆる人の手で浚渫をしないとやっぱり、泥が溜まってきたりとか、いろんなごみが溜まってきますので、1年に1回はそれを使っている長屋の者でちゃんと浚渫しなさいね、とすでにいろいろルールが決まっていたのです。ちゃんと江戸幕府のそういう命令書、お定め書きでそういうのがあります。でも、「1年に1回集まれ」って言ったっていろんな仕事をしている人がいるから、そういったことをやるという日にその仕事いって行けなわけですね。浚渫のほうに。じゃあ、どうすればいいかといったら、「その時はちょっとお金出せばいいことにしよう。お金出してその名前を世話役、長屋のリーダーに届けなさい。そうすれば、仕事行ってもいい、出かけてもいいよ。」今日でいえば、不在者投票みたいなそういうシステムになっているわけですけども。どうもそういうとりまとめをやったという史料はある。芭蕉がやっていたという史料はある。なので、ひょっとしたらそういうことをやっていたかもしれない。浚渫の世話役をやっていたかもしれないけれども、ひょっとしたらそれが芭蕉死後、芭蕉伝説というものがある。芭蕉の日本橋から関口に変っちゃった。つまり、神田の長屋の世話役からあの大洗堰の工事監督現場主任みたいになってしまったんですね。やっぱり、芭蕉という偉大な人にそんな伝説をくつつけるくらい、それほど江戸時代の人々にとって、この上水って大切だったわけです。「やっぱり、芭蕉先生の伝説をつくるのだったらそんじょそこらじゃだめだよ」と。「やっぱり、大洗堰くらい言わないとだめだよ」というような感じでそういう芭蕉伝説がくつついちゃう。で、芭蕉庵みたいなものが作られちゃって、芭蕉庵が幕末にも観光名所になる。そして、もうこの当時の人はたぶん疑わなかったでしょうね。「芭蕉先生はここに住んでたんだ。すごいね、やっぱり」と言っていた

のです。それくらい、水というものが一種の尊敬のまなざしをもって見られていた。逆に言うとそれくらい、江戸の市中の人にとって水って、ちょっと余裕のある存在になっているわけですね。もはや。「関口に堰を作るから」、「神田上水を作るから」っていうんで、「じゃあ、人柱出そう、誰か死んでくれ」ということはないわけです。それくらい一種の土木の精神といいますか、一種の自然科学精神だと思いますが、そういうものが発達したのが江戸時代ですね。ですので、さきほど申しました、新潟もそうだし、萩もそうだし、江戸もそうだし、近世に作られた河口に作られたということなんですけど。そういう高度な治水技術を前提にして、こういう、いわゆる俳諧の世界といいますか、文学の世界まで水というものがどんどん人の生活を潤わしていくというようなことになります。

これがさらに明治時代にはもっとすごいことになるわけですけども、古来これで完璧にクリアしたわけではない。江戸時代の人にはクリアしてはなくて、例えば、江戸時代で岐阜県では、宝暦治水事件というふうに我々呼んでいますけれども、宝暦年間に起きた治水事件、これは、木曾三川というふうな川が集まっちゃって、すごくあふれ出るとどうしようもないところがある。木曾川と長良川と揖斐川、この3つですけども、この木曾三川の氾濫をどうにかしようと言うんでこれは、江戸幕府の命令でだいたい、1700年くらい、江戸時代の真ん中くらいですけども、お前がやれというふうに言われたのが薩摩の人です。鹿児島の人です。これ大変だなと思いつつながら平田鞞負という人をはじめとする2千人くらいいたのかな、ちょっと正確な数字は覚えていませんけれども、すごいたくさんの死者を出して何とか何とかその治水を成功させようという事件もあるんですけども。これは一説によれば薩摩の人々の心に幕府への裏切りの心を起こした事件であると。これが、幕末に、薩摩と長州が手を結んで幕府を倒すという、幕末の政治劇の遠い遠い原因になったという人もいます。100年以上前のことですから果たして、それが結果的にさかのぼっていったという気がしますがそれでも。まあ、とにかくそれくらい、そういうことも言われるくらい薩

摩の人はたくさん死んじゃった。そういうこともあったので、決して治水という問題を江戸時代の人クリアーしたとは言えないですけども、その前の時代に比べるとだいぶ、「水を制す」というふうなことになってきたわけですね。

いま、幕末の話をしました。まさに幕末というのは実は水の世界でございまして、ペリーがご存じの通り黒船に乗ってやってきますね。最初4隻、次7隻、浦賀沖にやってきますけれども、この時に、日本人にとっての水というのはもう一つ、川じゃなく海なのです。もちろん、それまでも沿岸航海はありました。いわゆる、東廻り航路、西廻り航路と言いまして、日本中の沿岸、特に日本海側ですね。沿岸をずーと岸に沿うようにして船を出して行って、それで物を運ぶという西廻り航路、東廻り航路というのがあったのですけれども、ところがそんな岸边なんか見えない、陸地なんて見えないようなはるか遠くから黒船がやってきて、日本人に対して何かする大事件が起こったときに、日本人はびっくりしました。これで初めてではないんですけども、本格的な日本の外洋時代に突入するわけです。じゃあその時日本人は何もしなかったかといったら、決してそういうわけではないんですね。まず、なにをしたかといったら、ペリーが2回来ました。1回目は4隻浦賀に来まして、「また来年になったら来るからな」と言い残して帰って行く、そしたら、「また来年またペリーが来るからいまのうちになんとかしなきゃダメだよ」と言って、幕府が一生懸命、お台場を作るわけですね。お台場っていうのはいまのフジテレビの代名詞になっているわけですが、もともとは、あれは地名ではなくて普通名詞です。海上砲台、海上要塞というふうに言っているかと思いますが、つまり、陸地を離れても、離れ小島みたいに海に作られた砲台、極々狭い陸地ですね、そういう砲台をセットするために使う。それをお台場と言いますが、これを急遽作るわけです。そして、「次にペリーが来た時にとにかくちゃんと弾を打って追い返せるくらいしたいな」と、理想的ですけども本当に突貫工事で作るわけですね。ものすごくこれは急遽だったらしいですね。お台場を作るのは人足と言いますか労働者ですね。やっぱり急に作られたわけですね。急に作らなきゃならな

いし有能な人をそろえなきゃならないし、お金をださないと有能な人が集まりませんから。たくさんお金をだして幕府はすごく、すごくたくさんお金をだしてすごく、すごく優秀な人が集まり、結局7つ作ろうというふうになっていたわけです。最終的には、4だったかな、作ることができました。結局これは、アメリカとは戦争にならなかったですから、役に立たなかったですけども、でも作ろうって行って海の中にじゃぶ、じゃぶ入って行ってそういうものをわずかな時間で作れるくらいもう、なんていいですか、日本人と水との関係はそうなっているんですね。これは、川に作ることはもちろん違うことですけども、部分的には土木技術としては共通するものもあったと思います。ですから、そういうことがすごくできるくらい、水に対して自信が付いている。「必要があればなんでもやってやるわ」というくらい勢いがあるかもしれませんが、そういうことまでやっちゃったわけですね。

さらに幕末が終わって明治時代になりますと、明治5年にこれは、教科書にも書いてありますけれども、明治5年に新橋横浜間を日本で最初の鉄道が走る。蒸気機関車が走るというふうに書いてありますけれども、蒸気機関車って当時の人がめちゃくちゃ怖かったです。普通に住んでいる人がですよ。何しろ火を燃やして走る。そして、黒い煙がモクモクと出る。そして、暗いところで見ればはっきりしますけれども、火の粉がびゅんびゅん飛ぶわけですね。パッパッと上がるわけです。明るく飛ぶわけです。あんなものがうちのそばを走られたらどうなる。西洋の石の建物、石造りの建物だからいいかもしれないが、日本ではそうは言えない。うちが燃えるかもしれないっていうんで、一般の人々はとてとても最初のうちは蒸気機関車というものを恐れていたんですね。なので、新橋横浜間に鉄道路を作ろうと言った時にも、人家があるところは通れないわけです。みんなが反対するから、人が住んでいるところ。じゃあどうしようか考えたときに海に出しました。最初の新橋横浜間で当然線路を引くわけですけどもその線路の三分の一は海の上です。海の上にそれこそお台場の長いものを作るのです。最初こう、土を積んで行って、石を積んで土を積んで行って最後にその上に線路を通して、まさに人工島ですね。

いまで言えば羽田空港とか関西国際空港みたいなものになります。長い、長い人工島を作ってその上を走らせたわけです。これも繰り返しますが、鉄道の開設は明治5年なんです。鉄道そのものを覚えたのが昨日今日ぐらいの感じなときに、もうすでに海の上を走らせて、ヨーロッパ人はたぶん誰も考えない。そんなことをいきなりやっちゃう。日本人がすごいかすごくないか別として、とにかくそれくらい海というのは怖くないわけですね。水っていうのは怖くないんです。「陸がダメだったら海行きゃいいじゃん」みたいな、それでやっている。これだと明治5年の話ではありますが、まだまだ江戸時代の延長と見てもいいんで、江戸時代の人々にとって水というものがこれでどういうものであったかが非常によくわかるエピソードなのだろうというふうに思います。

そして、明治になりますと今度は、元に戻ります。原点に戻って川ですけども。さっき、宝暦治水のところでも申し上げました通り、何と言いますか、まだまだ日本人というのは川というものを完全に克服したわけではなかった訳です。逆に言えばいまの我々っていうのはなんか海と川と言ったら、海のほうが怖いという気がしますが当時の日本人にとってみればちがうのです。沿岸であれば海のほうがまだよかった。海のほうがまだよかったというのも、海だって荒れれば怖いですから安全ではないですけども。恐らくその当時の人々に「海と川どちらが怖いか」と言ったら「やっぱり川だよ」という人が多かったと思います。そのくらい日本の川というのは制御が難しい。ですから、川との闘いっていうのは実は明治になっても続きます。当然、いわゆる近代的な堤防。それまでの土山を作って、あるいは石垣の堤防から、例えばいままではコンクリートになるとかあるいは石の積み方を変えるとか、流路をいわゆるぎちぎちに固めちゃってなるべく川をまっすぐにして、むしろ川の流れを速くして、それで川の流れを少しでも一秒でも早く山から水を海へ送り出してしまおう。そういう発想になっていくわけですね。これは絶対、大きく言いますと西洋の手法です。日本人は江戸時代以前にそれをやっていなかったわけではないんですが、これは西洋流のやり方、いわゆるそういう一時しのぎ的なやり方が主流

になっていくわけです。ところが、それでもうまくいかないこともありまして、例えば、信濃川がございませぬ。利根川より長い、日本一長い川、信濃川なんですけれども、これもやっぱり何ていいますか、さっきの新潟の話をしましたけれども、新潟といえば信濃川河口に位置する町ですけども。そこにはたくさんの方が江戸時代から住んでいましたが、やっぱり、信濃川は長いと言いますけれども、すぐ後ろ、東側ですね。東側が山で水田が近いですから高低差があるんですね。ですから、長い長い水量が、水の流れがすごく速いわけで、それが山に雨が降るとすぐに下流に行って新潟全体を水浸しにしてしまう。人の命を奪ってしまう。これが何度も何度も続いたので、これどうしたかという、これは信濃川をもう一個作ったんです。第2信濃川と当時は言ったらしいのですが、いまは別の言い方をしているのだと思いますけれども、つまり、信濃川って言うのは群馬県のすぐ裏側っていうか、西側が水源なんですね。その山の中から発して西へ、西へいくわけですけども、そこで1回日本海に出るかな、出ないかなくらいのところまで近づきまして、一回内陸に戻って、またあらためて日本海に近づいて新潟から海に出る流路なんですね。もともとは。ぐねぐねって曲がっている流路だったんですね。下流で、川の河口のところで氾濫するのだったら、「途中で1回水、逃せばいいんじゃない」という考え方、頭のいい人が言うのですよね。つまり、1回日本海に近づいているところで半分くらい日本海に出しちゃえば、残りの半分だけ新潟の元々あった河口に流すようにすれば、これは氾濫することが減るであろうし、しかも、完全になくなしたら、今度は船に水運が、貨物の運搬ができませんから、完全になくすことはできないですけども、運搬にも好都合じゃないかということを考える人はいまして、結局、これも何度か失敗しますが、明治40年代に完成します。いまでも普通に水門つけて、国土交通省ですかね。運用しているんですけども。工事の時には第2信濃川と呼ばれていました。発想としてはこれ江戸時代からあったんです。江戸時代から「できたらよかったよね」と言った人はいるのですけれども、江戸時代はそのような技術はなかったようですよ。あるいは、資金がなかったかもし

れません。

こういうのはいっぱいありまして、もっと信濃川よりも大きいスケールでいきますと、琵琶湖です。琵琶湖って日本の真ん中にある大きい日本最大の湖ですけども、あれって地形がすごく特殊でしてあそこに流れ込む川って二百何十本あるのだそうです。数え方でしょうけれども、二百何十本の川が入ってくるわけです。出るのは1本だけなんです。琵琶湖の一番南の瀬田川というところがあります。瀬田川を抜けていっていまで言う、京都の鴨川に流れていくわけです。琵琶湖から抜けていく川は一本しかないですけども。つまりどうなるかっていうと、周りの山で雨が降ったら、全部それ琵琶湖という名の水たまりに流れていくわけです。どどどって流れ込むわけです。なので、これは実は明治時代に大問題でして。琵琶湖って結構水位の上がり下がりがあるんですけども、明治時代は、すごかったです。いま、我々水害がありますとテレビで「こんな高いところまで水がきました」という、ニュース番組で映像がありますけれども、あれは琵琶湖でも起こっているわけですね。いま、琵琶湖行くとき、いつも穏やかでなんとなく、いつでもブラックバス釣れるような、そういう穏やかな湖なんですけれども。明治40年代くらいまではそういうふうに非常に上下に激しい湖でした。これは結局外側に出る川が一本しかないの、どうするかと言ったら、これ日本海に出すわけには行かないですからここ、この一本のちょうど出口のところをちょうどぴよんと喉仏みたいに出ている陸地があるわけですね。この陸地を「ダイナマイトか何かで爆破してなくしちゃおう、そうすれば流れる量が増えて琵琶湖も水位安定するじゃないか」というようなことを言った人がいまして、結局その方向で実現しました。それで、琵琶湖って初めて私たちが今日見るような安定した。つまり、そういういわば安全な、ブラックバスを楽しめる湖になったわけですね。

で、最後の方、琵琶湖の余談になったわけですけども、つまり、何が言いたいのかと言いますと、江戸時代からどんどん我々の水に対するイメージ、変わっていったわけです。江戸時代に水っていうのはコントロールできるものなんだと、神田上水でもそうだったし、

河口を埋め立てて大きい都市を作れる。そういうふうには「水っていうのはコントロールすれば我々の生活を非常に豊かにするのである」ということは言わば常識になりました。そして、さらに明治時代、近代になりますとそれがもっと何ていいますか、攻撃的になるわけです。人間の心が。水を制すとか、コントロールを超えて、支配しちゃおう。「喉仏みたいな地形があれば爆破すればいいじゃん。信濃川があふれるならもう一個信濃川つくればいい」というように発想のスケールが大きくなっていく。発想のスケールが大きくなっていくといえは大きくなる。人間高慢になっていくといえは高慢になっていく。そういう時代になっていくわけです。

そこで本日のテーマであります伊奈忠次という人がこういう日本史の中でどういう役割を果たしていったかということを考えますと、まず、日本人が水というものに対してこれだけ自信をつけることができた。そのいわば、自信の最初にいる人が伊奈忠次という人ではないかというふうに思うわけです。つまり、人柱の時代ではない。白河上皇の時代でもない。人間っていうのは、水をコントロールできるんだということを最初にではないですけども、最初期に、そして一番大規模にやってみせたのが伊奈忠次であると。これは恐らく、間違いなく言えるところであります。もちろん、その前の時代には、加藤清正もいました。武田信玄もいましたし、その下には優秀なテクノクラートもいたんだろうと思います。でも、言わば極地戦であるのに対して、伊奈忠次という人は利根川という川を大きく曲げてそういう仕事に携わって、しかも、江戸という一国の首都を作ったんですね。これはその後の日本にもない大きなスケールでございまして、恐らくここから日本人というものは伊奈忠次から水というものに対する態度が変わったということが言える。自信がついたといってもいいと思います。そして、何ていいますか、利根川の東遷がきっかけとなり江戸という町が作られ、整備されて、江戸城ができて、江戸の隅々までお堀ができて、それが人を運ぶ物を運ぶというふうには、いわば、江戸の大都市、幕末に当時100万人いたそうですから、これは世界一の大都市の一つであると言ってもいいと思いますが、それを作ったの

も、もとはと言えば利根川東遷だったり、伊奈忠次だったり、そういう事業があったと言えると思います。

その時に我々が考えなければいけないのは、伊奈忠次がそういう大きな仕事をした、大きな仕事があったという時代の条件をもう一度振り返って考えてみますと、伊奈忠次という人は戦争をしなかった人です。もちろん、戦国時代ですから戦争はたくさんありました。伊奈忠次の仲間たちというか家臣団、ライバル達は次々と戦争で手柄をたてて、何万石何十万石という土地をもらうわけですが、伊奈忠次というのはそういうタイプの人ではなかった。そして、もともと彼が仕えたのが家康という人ですから、家康という戦国の世そのものを終わらせた人。あるいは家康の時代は、織豊政権の時代は過ぎてますから、豊臣秀吉以降、天下統一以降の日本全国に戦争そのものが少なくなっていた時期の家康、そういう人に仕えていた。ということで、戦争はない、ということは伊奈忠次という人が活躍できた極めて大きな条件だったということがいえると思います。戦争がない、また戦争が少ないということですけども。

これは一つ我々にも通じることだと思います。我々もこれだけいま、治水の技術が発達して、もちろんこの前の台風 19 号みたいにああいう難しい自然災害もあるわけですが、でも、台風 19 号が明治のはじめにきていたら死者の数が何万人、何十万人だったと思いますけれども。それがここまで減ったというか、亡くなった方がいるので良くないんですけども、明治と比べればましであるということになっているのも、いわば、「いまの我々が戦争のない世の中にいるから」ということは知っておかねばならない。つまり、戦国時代で言うと治水がなかった時期がありますが本当に領民が戦争で忙しかったら、治水なんか手がまわりませんから、したがって、伊奈忠次のような優秀な官僚も出てきづらい。このことは、我々はちゃんと強調してもいいのではないかというふうに思います。あくまでも、「平和な時代であったからこそ伊奈忠次というのはその手腕を存分に発揮することができた。」これを最後の言葉といたしまして、私のつたない話でございましたが講演とさせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

和：それではこれから今日ご講演いただいたお二方の先生とご一緒に、伊奈忠次についてのパネルディスカッションを始めさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。まず、はじめに最初にご講演頂いた小和田先生のご講演「代官頭伊奈忠次の生涯」について補足説明等ございましたら、どうぞお願いします。

小：先ほどの話で少し落としたというか、補足しておきたい点の一つありまして。実はですね、今日お話しましたように、忠次自身は2度徳川家から離れて3度目に家臣として採用されてくるとお話しましたが、実は本多正信もですね、今日も名前出しましたが、彼もやっぱり一向一揆のときに同じように出奔して、それで、戻ってきてそれでだんだんだんだ側近というか腹心として仕えるようになった。本多正信は通称返り新参、ですから、もともといたんですけど飛び出してまた戻ってきたわけですから、新参者、そういった形でやっぱりなんとなく最初のうちは白い目で見られるような、たぶん忠次のほうもそんな境遇にあったのではないかなというのが一つ。それからもう一つは例のいわゆるテクノクラートというような言い方いたしましたけれど、同じような人物が小堀遠州、小堀政一、彼はももとは浅井の家臣でそのあと秀吉に仕え、そして家康に仕えていくということで、いわゆる国奉行だとか特に小堀遠州、小堀政一の場合は築城にかなり力を入れて築城名人という、言い方はちょっとちがうかもしれませんが、そういった形で、同じように土木技術的なものの能力が高く評価された。そういう人物が丁度同じ頃いたんだということをお話を先ほどはちょっと話し忘れましたので、補足しておきます。

和：ありがとうございます。小和田先生のお話を受けて、ご質問とお話をさせて頂ければと

思います。

三河国で一向一揆が起きまして、ちょうど家康が三河統一をしかけた頃の大きな事件だったんですが、お話にもございましたように、そこに伊奈氏が一揆側についてしまったと、実際には伊奈一族の中では、分裂して、分かれて戦ったというお話もございますけれども、この辺は当時の一向一揆と松平家臣団、とりわけ伊奈一族との関係というかその辺はいかがでしょうか。

小：主従関係をとるのか宗教的な信仰をとるのか、ということで忠次のお父さん忠家はたぶんかなり熱烈な一向宗信者、浄土真宗信者だったと思いますので、それで、一揆側についているんですけれども、ただ、家康は、ご承知のとおり、そういう家臣団分裂のような危機を乗り越えながら、それでもなんとかか一向一揆を鎮圧していくということによって、いわゆる三河一国の確保に成功します。そのあと、家康と武田信玄が共謀して、間に挟まった今川氏真を打ったわけですが、それによって、通称、大井川分割という形で駿河の分割ということで、家康自身が遠江まで勢力を広げていく。その遠江のいろんな支配に、今日も講演の中でお話しましたけれど、特に天竜川、遠江を流れてますので、その治水に成功したという、そういう側面が大きかったんじゃないかなと思います。

和：ありがとうございます。そのような伊奈氏の三河時代のことでよくわからないところも多いんですが、大きなこういう事件の中で、伊奈一族は非常に関わりを持っていたということが一つ明らかになったわけでございます。

続きまして、門井先生に「伊奈忠次とその時代」ということでお話を伺ったわけですが、河川を日本史全体の中で壮大に語っていただきまして、さらにその中で伊奈忠次を位置

づけて頂いたわけですが、補足がございましたらお願いいたします。

門：一点だけ、言い残したことがあります。これは、秀吉なんですけど、実は家康以前に加藤清正が治水をやった、武田信玄が治水をやったという話をしましたけれど、実はもう1人、豊臣秀吉、天下人の豊臣秀吉もやっているんですね。これは何をやったかという、宇治川をやりました。宇治川っていうのは、京都の南側をだいたい地図で言うと北が上だとすると、右から左へ流れていきます。京都があって京都の下の辺り、宇治の山の中から左の方へ西の方へ流れていく。それが他の川と合流して、南へ流れていくんですけども、もうちょっと北側に行くと伏見の山がありますから、ここに伏見城を作ろうといったときに、物運ぶのに便利だからって言うんで、宇治川の付け替えをしたんですね。流路を北に変えたんです。実はこういう工事をしてそれによって伏見城というのができるわけなんですけれども、逆に言えば、あの天下人の秀吉ですら、川ということに関してはその程度のことしかできなかった。あるいはしなかったわけですね。秀吉、家康といますと天下に並び立つ存在というイメージがありますが、こと治水ということに関しては、二人の間では大きな差があります。それこそ、宇治川と利根川くらいの差です。これを一点補足したい点です。

和：ありがとうございます。

いまのお話を受けまして、門井先生にちょっとご質問させていただきたいんですが、今日のお話の中で、日本史を壮大に語られた中で、日本人が水の制御、コントロールに自信を持つ時代になったとき、その最初の人伊奈忠次だろうという風なお話をされたと思いますが、その辺をもう少し具体的に、例えば利根川の先ほどの東遷とという話も入っ

ていましたが、その辺との比較するなどお話いただけましたら。

門：これも、先ほど言うべきだったかもしれませんが、利根川東遷ひとつは、小和田先生がお話になったところで、北条氏を滅ぼしたあと、関八州に入ってきた家康が、じゃあ首都は小田原じゃなくて江戸にしようといったのはだれかと、家康が決めたのか、それとも秀吉がそう命じたのかという問題がありまして、小和田先生は忠次が家康に進言した可能性について触れておられたかと思うんですが、これは僕の想像力も含めて魅力的だなと思いました。伊奈忠次というのは、小和田先生もおっしゃっていたそれまでの天竜川の治水、五か国の総検地ということでは、治水ということを知ってるわけですね。知ってるから、江戸という町を見ても未発達の状態を見ても、これだったら、極端に言えば、「僕の治水技術があればなんとかなりますよ」と、「でっかい都市作れますよ」といった可能性はある。とそう思いたいところがある。それが、言った時にはちょっとあいつほら吹きすぎではないか、少し自信を持ちすぎではないかと思った人もいたでしょうけど、結果として、いま江戸がどうなっているか、利根川がどうなっているか、それは忠次が言ったかもしれない、その内容のとおりになっているわけですから、これはひとつ日本史が大きく動いた瞬間だと見てみてもいいのではないかと思います。

和：ありがとうございます。もう一つ、先生の著書「家康、江戸を建てる」。先ほどお話ありましたけれど、特に大久保主水という人が神田上水を引いてくるという話をしてくださいましたが、ドラマでもございましたが、手助けするといいますか、指揮するといいますか。そういう役割が伊奈忠次ですね。もう一つ思うんですけど、忠次の例えば江戸の街

づくりとの関わりですね、この水道のことも含めて。先生何かお気づきのところがございますたらちょっとお話いただけますか。

門：そうですね、神田上水との関係で行くとちょっと難しいところはありまして。僕の本では神田上水の話と利根川の話は別々なんです。でも、水つながりということでNHKでドラマにするときシナリオを一緒にしちゃったと。ああいうお芝居の形に仕上げてくれたという経緯がありますので、神田上水と伊奈忠次に直接のつながりはないかもしれない。とはいえ、相手は同じ水ですから、土木技術としては共通しているものがあるだろうというふうに思いますし、言ってみれば、利根川東遷をミニマムにしたという、とても小手の利くような形にしたのが神田上水かなと思っております。

和：なるほど、ありがとうございます。それではお二方のご講演を受けまして、トータルで、お話を伺っていきたくて思っております。例えば、伊奈忠次ということに関しますと、よく治水技術を関東流とか伊奈流という江戸時代より語り継がれてきているわけですが、そのなかで、特に利根川東遷の最初のきっかけとなりました会の川の締め切りですとか、あるいは築堤技術なんかでいえばいわゆる霞堤なんていうものもございます。これは、戦国時代に詳しい小和田先生にお尋ねしてみたいのですが、こういったとくに霞堤であったり築堤技術で武田流と言われますが、その辺はいかがでございましょうか。

小：江戸時代のいわゆる治水技術の基本は甲州流川除法みたいな言われ方をするように、基本はやっぱり武田式。ですから、おそらく、伊奈備前も武田のそういうやり方を元の武田の家臣あたりから詳しく聞いたり、あるいは先ほど申しましたように三河・遠江・甲斐・信濃・駿河ですから、甲斐・信濃はやはり本

人自身、いろいろ見て歩いてこういう技術があるんだっていうね、そういう築堤の技術なんかをたぶん学んだんだと思いますね。それをやはりお話にでた霞堤ですね。それこそ全部締め切っちゃうんじゃないかって、いわゆる遊水地なんかを設けるようなそういったのが先ほどの富士川の備前堤なんかにも応用されているんじゃないかということで、かなりそういった意味で、技術的なものは私はやっぱり信玄堤が原点になっているんじゃないかなって言う思いはもっています。というのは、もともとの三河・遠江・駿河三か国は今川領国ですけれど、今川でそういった治水の目立った進んだものというのは見当たらないですよ。何々堤っていうのは今川では無いんですよ。だから、そういった意味で言うと、やはり武田の流儀というかやり方がそのまま家康に受け継がれて、それを家康に受け継ぐ大きなきっかけになったのが忠次じゃないかなというふうに思っております。

和：ありがとうございます。同じ質問を門井先生にお尋ねしたいんですが、例えば伊奈忠次が、最初の大きな技術を発見した人ということですが、その場合の治水技術としまして日本史の流れの中で、どういう風な技術を発揮したのかなという風なところちょっと疑問に感じたんですが。言い方があまりよくないのですが、忠次がその技術に自信を持ったというその背景ですね、その辺をどのようにお考えでしょうか。

門：まさに小和田先生がおっしゃったとおりのことだと思います。甲斐という、いわゆる治水先進国をつぶさに見たということが、伊奈忠次にとっては大きな自信になったのだろうというふうに思うんですね。要するに治水先進国ということは、日本一暴れ川が多いという事でもあったわけですから、そういう意味では、これも想像ですけれども、今川領で

はそんなにいい治水技術はない。そもそも暴れ川が少ないからじゃないかというふうにも考えられますし、旧今川領と旧武田領、両方見ることができれば、おのずから、より進んでいる技術の本質的なところまでわかるんじゃないかな。それが伊奈忠次の大きな自信になっていたのかなと思います。

和：ありがとうございます。さて、そこで伊奈忠次の技術者、テクノクラークという表現がございましたけれども、つまり、戦国の世が、いわゆる槍働きで戦場できちんと戦って功績をあげるというようなことが重んじられる時代にあって、こういう技術者がなぜ抱えられたか。とくに関東に徳川氏が入ったときにやはり 250 万石という他の遠江なんかも含めてなんです、最大の大名としていたわけですけども。その場合、私なんかの個人的な推計ですが、4 万人くらい兵力はいたんじゃないかと。そうするとその関東に入ったときに、伊奈忠次って人は 1 万石ないしは 1 万 3 千石を与えられて、この伊奈の地に陣屋を構えたわけですけども、仮に 4 万人くらいとするとそのうち実は 1 万石以上与えられた大身、上級家臣ですが、これは 40 人しかいないんですね。トップは井伊直政、以下、本多忠勝、榊原康政ですがこういった人たちは 12 万とか 10 万とかもらってる。そして、伊奈忠次はその 40 人しかいない 1 万石以上の大身の家臣に加わってた、これはものすごいことなんです。為政者として、戦闘での人とこういった技能者をどのように家康は見ていたんだろうと。お考えをちょっとお聞かせ願えればと思います。

小：これは先ほど講演の中でも少し触れたところですけども、いわゆる家臣団の中に槍働きだけが得意な家臣とどちらかというと槍働きは苦手だけれど計算とか兵站奉行的なね、そういうことに長けた人もいれば、伊奈

忠次のように治水技術とかそういったものに長けた、それぞれいってみれば、私が思うに「家康は適材適所な人事配置をやってたな」という。つまり、伊奈忠次に槍を持って突っ込め、といわれても彼はちょっと後ずさりしちゃったと思うので、むしろ「こいつはこういう仕事が向いてるんだな」というところを見て、それでそういう仕事に一生懸命貼り付けてという形だと思う。ただその場合これもやっぱり、家臣団の中での感情、これも先ほど講演のなかでもちょっと触れましたけど、やっぱり、目立つのは武功なんです。戦いに猪突猛進型で突っ込んでいく。いわゆる一番首の功名とか、武士としては花形なんで、それはやはり石高は高く上げないと納得しないだろう。だけど、下積みの奉行的な仕事をする人も家臣として相当それなりに評価したい。だから家康は伊奈忠次を 1 万石ないし 1 万 3 千石というね、一応、1 万石以上あれば大名ですから、大名として扱ったんだということになると思いますが。おそらく忠次自身は、これは「井伊直政、本多忠勝と本当は遜色ないんだけどなあ」と思っていたと思いますよ。思いますけど、徳川家臣団の中での序列というか、空気というのを察して、「俺は 1 万石しかないけれども、徳川家を支える人なんだ」という自負と自信を持って望んで、いろんな仕事に邁進したんじゃないかなと思います。だから、忠次自身ある程度、1 万石ないし 1 万 3 千石という形で大名として認めてくれた家康には、やっぱり感謝していたと思いますね。

和：はい、ありがとうございます。門井先生いかがでしょうか。

門：そうですね。僕もまったく小和田先生のお話に賛成なんです。1 万石、1 万 3 千石しか認めてもらえなかった。逆に言えば 1 万 3 千石くらいには認めてもらえていたわけで

すね。これはまさに和泉先生が40人の中の一人だったということも大きな意味なんだろうという風に思います。それと、治水に対して自信が出てきたというようなことを僕さっきから強調しすぎているきらいがあるんですが。もう一つ、治水といえども川が相手っていうのはそれはそれで命がけだったと思うんですね。戦場に行って白刃の下をくぐるようなことではないかもしれないけれど。やはりどうしても武将ですから、いつも自分は川から遠くに離れていて、家臣に「あそこを埋めてこい」とか「そこに堤防を作ってこい」とか言っているだけではおそらく人心を獲得することは出来なかった。部下はついてこなかった。そういう意味では伊奈忠次の仕事も非常に文字通りの意味で命がけであったのではないかなというふうに思います。

和：ありがとうございます。それと、もうひとつ伊奈忠次の代表的な仕事として備前堀というものがございます。水戸の千波湖の方から引かれた備前堀ですとか。あるいは高崎市の方でやはり天狗岩堰という用水の末端から引いた備前堀というのがございますが。土木技術でもいわゆる利水のほうですね。利水という点でも非常に忠次っていう人は優れた技能を持っていたと思うんですが。特にこの備前堀というのは、なんせ400年以上経ったいまでもこの三つの代表的な備前堀は灌漑用水として機能しているわけですから。これはものすごい、私個人としては大切に使われてきたからこそ残ってる。これは、今日のお話とは直接関係ないかもしれませんが、こういうような利水の方ですね技能といいますか、戦国時代あるいは江戸の初期ぐらいのように見られるか。さっきの上水なんか利水ですよ。完全にそうですよね。この点について門井先生の方からちょっとお願い

します。

門：そうですね、備前堀っていうのはいま見ると、一見素朴に見えるといいますか。江戸城のお堀よりもずっと素朴に見えるわけですが。ただ、本当に素朴なものが400年ももつわけがないので、選定がしっかりしていたということと、尊敬を持ってきちんとメンテナンスをする人が常にその時代にいたことなんだろうと思います。我々はどうしてもこんにちの言葉で、近代の言葉で当時を勉強せざるを得ませんので、治水とか利水という言葉を使うわけですけど。伊奈忠次に関してはあるいは当時の人に関してはその言葉の区別はなかったんだろうと思うわけですね。要するに「水が仕事だ」くらいの感じで全部同じようなイメージでやっていたんだろうと思いますので。その点では、備前堀、伊奈備前守の名が冠せられたとしてもちっとも不思議ではない。むしろ素晴らしいことだと思います。

和：小和田先生にも同じ質問をしたいのですが、甲州流の堤というのもただ単に洪水を防ぐというより当然やっぱり田畑を開発しようとしていたのだと思うんですけども、利水というのは甲州流の場合どのような技術でしょうか。

小：甲州流で注目しているのは、戦国時代は単に戦いに明け暮れていたという時代ではなくて、いろんな意味で技術革新の時代、その一つが甲州でいくと金山開発ですよ。そうすると要するに山を、崖を、というか岩を削っていくという掘削技術。それとお城がこの頃から、関東はちょっと遅れるんですけども、いわゆる石垣を積んだお城がたくさん出てくる。そういう築城術。それから灌漑用水技術、三位一体で進んだのが戦国時代だと思うんで、そういった意味での有名なのは、箱根用水というのがあります。それこそ箱根の

芦ノ湖の水を、外輪山をトンネルでもって駿河の方に水を引っ張っていく。そういう技術ができる。これは、普通の平地でも上流で堰き止めて、途中で山があるとすると下に水が行かなかったけれども、その山にトンネルを掘って下に水を流す。そういう灌漑水利技術が飛躍的にこの徳川時代初期に発達していく。そういうものに乗ったというか、むしろ、率先して、忠次がそれを進めたという側面があるわけです。私はとそういう鉾山掘削技術、石垣築城技術、そして、灌漑用水技術、これが本当に一体となっていたのがこの時代であったというふうに思います。それともう一つね、たぶん多くの方はご存じだと思いますが、備前堀の備前、これは伊奈備前守になったからですけど、これが確か慶長4年ですよ。1599年に従五位下で備前守になったんで、備前になったんで呼ばれるようになった。それまで、たしか熊蔵ですよ。

和：はい、ありがとうございます。そのように非常に忠次が単に治水だけでなく利水という側面にも目を向けて新田開発に力を発揮させたという機能を持っていたわけでした。

門：補足をさせていただきたいのですが、まさに小和田先生のおっしゃる鉾山技術、鉾山掘削技術が当時発達したということですが、これは山を掘るといのは、もちろん土があるのが仕事なのですが土を掘るといことに実は半分くらい、これも水の仕事なのですね。土を半分くらい その近代の清水トンネル、新潟の山のトンネルを作るといことを調べたことがあるのですが、どの時代でも変わらないですね。山っていうのは土で埋まっているのは半分で後の半分は水で埋まっているんですね。スポンジみたいなもんです。ですから、そこを掘るといのは一面水に対するすごく鋭いセンスがないと、そもそも山を

掘れないので、そういう点でも、水の時代であるということと鉾山の時代ということである。まさに表裏一体だなと思います。いまの先生の話聞いて思いました。以上です。
和：ありがとうございます。おっしゃるとおりで水脈なんかもお城を作っていると関係ありますしね。

さて、次にお二方の先生が、伊奈町にございます、さきほどお話にもあった伊奈氏屋敷跡と呼ばれる通常我々は小室陣屋と言っておりますが、伊奈氏屋敷跡をご覧いただいたと思います。この伊奈氏屋敷跡には北側の裏門にあたる場所によく言われる伊豆の方の北条氏時代に作られた、山中城なんかにあります、障子堀というお堀の作り方というのですか、そういうものがございますが、それが伊奈氏屋敷跡でも確認できるわけです。このような障子堀が戦国時代の城郭の特色だとされているんですが。その辺のところを戦国時代専門の小和田先生にお話しただければと思います。

小：今日この会場へ来る直前に伊奈氏屋敷跡をご案内してもらったのですが、発掘した時の障子堀は保存のため埋められていたので障子堀そのものは見ることはできなかったですけども。いまお話の障子堀、これは俗に北条流築城法という言われ方をします。つまり、北条氏の城に一番多い。一番有名なのは、行かれた方もいらっしゃると思いますが、山中城。箱根の途中のこれは、非常に完全にすごい障子堀になっていまして。これはちょっと笑える話、数年前、若い女の子の学生を連れて障子堀の山中城を案内したときに、障子堀という言い方で言っていたのだけれど、「障子って何」って言うんですよ。いまの若い子は、障子を知らないんだと思ったんですね。家に障子がある家は減ってきたと思うのですが、現場見たら、「なんだワッフル堀か」

って言うんですね。これからはワッフル堀って言わなきゃならないなど。まさに障子の棧のように仕切って移動できないようにした、小分けにした堀なんですけど。その空堀はまさに北条氏の手法で山中城だけではありませんで北条の城である小田原城、下田城などいろんなところで使っている。この関東でも他の地域でも見つかっています。これは北条氏の築城の手法を伊奈忠次も取り込んだんじゃないかなと私は思っています。そういった意味では、結構そういう遺跡として残っているのはやっぱりすごいなと思いました。陣屋と言いながら、やっぱり、伊奈忠次もここを本拠として、まあ自分は城づくりを利用したつもりであれだけの広大な面積を確保していたんじゃないかなというふうに思いますね。

和：ありがとうございます。このように非常に伊奈氏屋敷跡もそういう独特な構造を持っていたところがおわかりいただけたと思いますが。

さて、このような伊奈氏、伊奈忠次、および、伊奈氏陣屋、屋敷というか、こういったものを持っている我が伊奈町ですが。このような伊奈忠次がこの伊奈町に陣屋を築いたということで、伊奈町の方々はこの忠次の功績を称え、かつ誇りを持っていらっしゃるかと伺っております。このような伊奈町は、まず一つどのように先生方の目に映るのか。その辺のところをお聞かせいただきたいと思います。

門：今年は町制施行 50 周年ということなんだそうですが。僕なんかは家康を、利根川のことを書こうと思って数年前に勉強を始めて伊奈忠次という素晴らしい人がいるということを知ったわけです。ところが僕なんかは数年前ですが、すでにこの町は 50 年前から伊奈忠次という人を尊敬していて顕彰して

いて、しかも、町の名前にまでしてしまっている。それがひとつ驚きになっていますし、地元の人は 50 年前から知っていますが、日本史、日本人全体からというともだだもう一つ難しい問題だなとふうにも思いました。

和：ありがとうございます。小和田先生いかがでしょうか。

小：先程、控室で、3 人でちょっと雑談していた時に、普通は市の名前とか、町の名前というのはもともとあった土地の名前でつけられる。この伊奈町の場合はむしろ、伊奈忠次というこの地域を配していた、代官頭の伊奈に最初、伊奈村、伊奈町という形で、まさに逆なんですよね。普通とはね、その辺がちょっと面白いねと話していたんです。それはこの地元の人が伊奈忠次をそれだけ自分たちの誇りに思ってくれている。それは非常にありがたいというか、うれしいということです。私自身は、徳川家臣団いろいろ研究してますけれども、そういった形で現在、どの程度そういう武将の名前がそのまま市町村名で残っているというのはちょっと興味あるなあそんな感じもしました。

和：ありがとうございます。先生方に伊奈町を知っていただけたかなと思います。

さて、その次にです。このような伊奈氏屋敷跡を町としても今後、どのように活用していくか。特にこういう歴史的遺産でございませぬ。こういったものをどのように活用していくか、というようなことを考えてきたいと思います。先生方はあちこちの歴史遺産をご覧になっていらっしゃるかと思いますが、まずはそういうお城とか立派なものがあるわけではございませんので、すぐにパッと飛びついてくれるようなところではございませぬけれども、しかしやっぱりこういった 400 年以上続く歴史遺産というものをどのように活用したらよろしいか。ほかの地域の活用

の事例というのも、もしご存知でしたら、ご教示いただきながら、そういったものもお話いただければと思います。

小：いま、現在、冒頭でご紹介いただきまして、日本城郭協会の理事長をさせていただいております。それこそ日本にはたぶん4万から5万くらい城跡があると思うんですけど、そういう中で伊奈氏屋敷跡は、埼玉県指定史跡ということで保存整備に力を入れている。これは本当にうれしいことで、場所によっては、もうマンションが建ったりゴルフ場になっちゃったりで、跡形もないという所が非常に多い中で、この伊奈氏屋敷跡はかなり広大で、どこからどこまでが屋敷でどうなのかとちょっとなかなかわからない、というところもあるかもしれませんが、史跡として保存されていて、それが今後ちゃんと続いていってもらえるといいと思っています。その場合、やはり地元の人に親しまれる。それは、どういうふうにしたらいいかというと、ある程度わかりやすい表示ですね。これは何も建物を復元するとか、城門を復元するとかでなくて、むしろ案内板があって、最近では技術的な流れでいろんな形で、形がなくても見るができるような技術が発達してますので、そういったものを合わせながら、活用しながら一つはやっぱり、地元の人に親しまれる史跡として保存整備を進めてもらいたいなと思っています。

和：ありがとうございます。門井先生はいかがですか。

門：僕もいま、小和田先生のお話を興味深く拝聴したのですが、例えば、一つ、コンピューターの活用、CG、3Dといった新しい技術の活用ということがあると思います。それともう一つは、僕なんかの立場ですと、歴史の作家とは話すんですけども、いわゆるパンフレットの類ですね。一番手軽な物は配りもの

がパンフレット。一番すごい重宝するのは、町史、市史、県史、会社だったら社史、こういった文献による資料。文献によって知らない人にも教えていくということが一つ、我々にとっては、伊奈町に行かなくても、伊奈町のことを知ることができるという点では、とても大切になっていくかと思っています。昨今の若い人ほどインターネットで調べる率はあがっていきます。僕は昔ながらの紙の本を買って、調べるタイプの人ですけども、恐らく、僕は最後の世代の一人だと思います。僕より若い人はどんどんインターネットを使っていくと思いますので、そういった方への整備も必要かなとも思います。

和：ありがとうございました。この伊奈町の遺跡というものをどのように保存活用していくかという問題は、町の方でもいろいろお考えいただいているようですが、いまのお二方の先生方のご教示も非常に参考になったことと思います。まず、これをふまえて進めていただければと思います。

もう一つお尋ねしたいことが、伊奈忠次という人物を、町民のもう一つの願いですね。何とか大河ドラマですね。全部でというのは無理だろうと思いますが、何とか入れられないか。もうすでに今日のお話でも、門井先生はお正月のあのゴールデンタイムですね、NHKさんを通して伊奈忠次をご紹介してくださいって非常にありがたいです。足を向けて寝られない思っていますが、これからはですね、例えば、徳川家康が出演するようなドラマで、できたら伊奈忠次というのがちょっとでもいいから出せないかと正直なところ町民の願いなんです。先に門井先生はいかががございましょうか

門：もちろん、僕は歴史物の書き手ですから、いろいろそういう映像のほうにという野心もないとは申しませんが、『家康、江

戸を建てる』の原作ドラマを脚本書いた方が今度の来年後期の朝ドラ起用されましてですね、僕が書いたわけではありませんけれども良かったなと思っていますけれども、『家康、江戸を建てる』っていうのは要するに、伊奈忠次を主人公とした小説を書いてくれという話ですね。僕ではなく誰かですよ。全国で言われます。僕でなくても誰か優秀な作家が書けばそれでいいことなんですけれども、今回ちょっと潮目が変わってきたかなと思うのは、家康っていう人は、昔はそれこそ強い武将のイメージだったんですね。でも、最近ではそういうイメージではない、それだけじゃない、戦いに勝っただけじゃない、これほど民政面でこれだけ顕著な功績を顕して、いまの我々に文化的な側面に対して貢献しているということがどんどんわかってきて、どんどんそういう本が増えてきています。江戸の町づくりという本がいまはたくさんあります。ですから、そういう戦いの家康という点では、ちょっと伊奈忠次の出る幕はなかったわけですが、誰が家康を書いてもおのずから伊奈忠次に触れざるを得ない。たぶん、触れたくなくても触れざるを得ないという時代がもうすぐくるわけです。誰が書いてもそうなると思います。ですので、その点では町民の皆さんにはご期待もって頂いてもいいんじゃないかなと思います。

和：ありがとうございます。希望が持てます。では、小和田先生たくさん監修されてますけれどもいかがでしょうか。

小：私自身、NHK 大河ドラマ、96年秀吉から

来年で7作目ですので、戦国だと話は来んですけれども。いま門井先生がおっしゃったように、まさに家康をとりあげても切り口がいままでとはこれから違ってくると思うんですね。そう言った意味でいまお話しの民政面、いわゆるいまの我々の政治に、あるいは生活につながってくるような、そういう基盤を作ってきた伊奈忠次っていう人がもう少し全面で見直されてもいいはずですよ。当然家康のドラマということになるといままでは合戦合戦、あるいは信長・秀吉との関係みたいなものが主だったんですが、むしろ目線を下においてというか、地域に置いてあるというドラマになってくると、当然、伊奈忠次なんかは相当重要な役どころでというか役回りが出てくるはずなんで、その辺は私も期待したいなと思っています。

和：ありがとうございます。ということで非常に希望が持てました。

短い時間でしたが、このように伊奈忠次という方がわが町にいて、しかも今日もおその精神といたしまして、受け継がれているということが、伊奈町の町民として誇りに思っていていただいてよろしいと思います。本日、お二人の先生に心強いお言葉も頂戴いたしましたので、より自信をもってこれからも進めていきたいと存じます。

予定の時間よりは若干早いですが、これももちましてパネルディスカッションを終了させていただきます。先生方どうもありがとうございました。

閉会行事

教育長あいさつ